



Title	＜書評＞ 辻大地『前近代イスラーム社会と＜同性愛＞：男性同士の性愛関係から見た社会通念の形成過程』九州大学出版会2025
Author(s)	辻上, 奈美江
Citation	アラブ・イスラム研究. 2025, 23, p. 25-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106219
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

辻大地『前近代イスラーム社会と＜同性愛＞－男性同士の性愛関係から見た社会通念の形成過程』九州大学出版会2025

辻上 奈美江*

本書は、九世紀から十四世紀のアラブ・イスラーム社会における「同性愛」概念が芽生えるまでの過程を、逸話をはじめとする文学作品を題材に検討したものである。同性愛は、前近代のみならず、近代を迎えたイスラーム社会においても禁止されている、とひろく考えられてきた。だが、本書は、十三世紀にはすでにイスラーム社会において「同性愛」の概念が芽生えはじめていたと大胆にも指摘している点が注目される。

現在では、「同性愛」とは、十九世紀の西洋社会においてはじめて、同性に対して恋愛感情や性的関心をいだく性的指向として認識されるようになったと考えられている。言い換えれば、イスラーム社会のみならず西洋社会においても、近代以前には同性愛の概念は存在しなかった。近代以前のキリスト教圏では、同性間の性行為は「ソドミー」と呼ばれ、自慰や中絶・避妊、獣姦などと同様、生殖に結びつかない、自然に反する罪と考えられてきた。しかし近代を迎えると、それまで「行為」が重視されてきた同性間の性的関係は、「性質」が重視されるようになってきた。近代における性の歴史に関する研究を進展させたことで知られるミシェル・フーコーは、かつて性懲りもない異端者とみなされた「男色家」^{ソドミット}が、同性愛者という「種族」として分類されるようになったと指摘する（フーコー1986=2009, 55-56）。辻は、フーコーを援用し、西洋近代では、性的嗜好(sexual preference)ではなく性的指向(sexual orientation)、すなわちどの性別に恋愛感情や性的魅力を感じるかのアイデンティティの問題へと移行したと説明する（辻2025, 26）。『性の歴史 I 知への意志』によれば、このような「逸脱」した性的行動をする同性愛者は、近代西洋社会において「倒錯者」とみなされ、法や禁忌として禁止されるのではなく、権力装置のなかで管理され、統制される対象となった（フーコー1986=2009, 116）。

このようなフーコーの議論を下敷きにして、本書は同性愛が芽生えるためのプロセスとして、以下の四つの段階が必須であると議論する。その四つとは、①「挿入モデル」に基づく社会構造、②サブカルチャーの発展、③医学・性科学の発展、そして④言説上における性的指向の確立という段階である。

第一の「挿入モデル」とは、能動的な役割を担う者による受動的役割を担う者に

* 上智大学総合グローバル学部教授

対する挿入行為を指すが、そこには当然ながら上位者と下位者、支配者と非支配者という含意がある。著者によれば、前近代イスラーム社会においては、成人男性と「非・成人男性」というやや曖昧に分類される者との性的行為として捉えられる。ここでいう「非・成人男性」とは、「グラーム（少年や奴隷）」、去勢者、ムハンナス（女装する男性、受動側での性交を行う成人男性などを指す）を含む者である。本書の第三章において九世紀のアップース朝社会で文人として活躍したジャーヒズによる『ジャーリヤとグラームの美点の書』を主な史料として分析した辻は、当時もイスラーム法では同性との性愛行動は強く禁止されていたにもかかわらず、この「挿入モデル」に則った行為は比較的寛容に行われていたと指摘する。そして当時は、性的指向のアイデンティティではなく、「行為」が重視された。この第一段階は、前近代の西洋社会にも見られるような、行為を重視するものである。

第二の点であるサブカルチャーとは、一般的には社会に広く浸透する主流の文化とは異なる価値観や行動様式を持つ人びとによって担われる文化として理解される。西洋近代においても、性的少数者は主流から排除され、あるいは自ら「主流」であることに抵抗しながら、少数者としてのアイデンティティの形成に努めてきた。本著者は、このようないわば「土壌」が前近代イスラーム社会に存在したかを検証するために、前近代の性愛学文献におけるムハンナス（異性装）に着目する。史料の分析を通じて、九～十二世紀のイスラーム社会では、異性装は忌避される存在としてみなされたものの、サブカルチャーを形成し一定の集団意識を有していたと著者は論じる。

第三の医学・性科学の発展については、『医学典範』の著者としてひろく知られるイブン・シーナーなどを参照し、医学文献においても性愛に関する記述が多く見られたことを明らかにした。そして最後に、本書は十三世紀になると、逸話が史実として重視されるようになったことに着目する。このように史料の価値や意味合いが変化した結果、それまでムハンナスとして宮廷に出入りしていた人物アップーダに関する逸話が、その人物に関する「史実」へと転換し、さらにはムハンナスであることがアップーダの「性質」＝アイデンティティとみなされるに至ったという。これらの四つの段階を経て、前近代のイスラーム社会ではアイデンティティとしての同性愛の概念が芽生えたというのが筆者の結論である。

西洋社会が近代を迎えるのが十七世紀以降であり、その後十九世紀を迎えると男色家が同性愛者と認められるに至ったと考えれば、イスラーム社会で十三世紀にはやくも「同性愛」がアイデンティティとしてみなされ始めていたことを指摘した本書は注目に値する。しばしばイスラーム社会は、時代や地域にかかわらずなく、同性愛を認めないとのイメージが先行している。実際に、イスラームの宗教的教義上、同性愛は忌避されるものとみなされている。同性間の性行為が発覚した場合に死刑に処される国もあるものの、宗教上の教義がムスリムが多数派を占める国ではすべからず法律のように機能しているという部外者の勘違いや思い込みが一般的な知識

として流通している問題もある。このような中で、本書は前近代社会においては、時代や地域によっては同性間の性的行為は比較的寛容に実践されていたと指摘している。そして同性愛概念が、西洋社会にも先んじて生まれていたとすれば画期的で、注目に値する事実である。ただし、同性愛概念が実際に芽吹いたとみなして良いかどうかについては、筆者自身も断言できないと断っているように、より詳しい検証と検討が必要とも思われる。この点については後ほど議論する。

第二の本書の功績は、従来のイスラーム世界の同性愛研究を含めたセクシュアリティ研究の空白を埋めたことである。英語での研究動向については、本書にも詳しくまとめられているので、ここでの説明は省くこととするが、日本語では前近代・近代以降を問わず、セクシュアリティや同性愛に関する研究はほとんど行われてこなかった。このことが先述のように、部外者による誤解に基づく勝手なイメージを膨らませることにもつながっていたと考えられる。本書に加えて、同時期にイスラエルの性的少数者の権利をナショナリズムの観点から分析した保井啓志著『権利の名のもとに－イスラエルにおける性的少数者の権利と動物の権利』（東京大学出版会、2025年）が出版された。保井はクィア研究の立場から現代の政治やナショナリズムに着目したのに対して、本書は前近代の「性愛学文献」を分析するという文学的アプローチである。両者は、扱う素材も時代も異なり、それゆえに方法論も異なるが、それぞれ先述のミシェル・フーコーの抑圧仮説やジャスピル・プアのホモナショナリズムの議論を下敷きに、中東・イスラーム社会におけるセクシュアリティを検討している。両者の研究成果を皮切りに、今後中東・イスラーム社会のセクシュアリティ研究が日本でも進展することが期待される。

そして本書のもうひとつの意義は、九世紀以降、同性愛に限らず、性に関する豊かな表現活動が存在したことを裏付けつつ、当時のイスラーム社会の文学の発展の系譜を示していることである。著者は主要な分析材料のひとつである史料『ジャーリヤとグラームの美点の書』の翻訳と詳細な注を付して、当時の性に関する表現活動を丁寧で紹介している。アラブ・イスラーム社会においては、現代でも言葉遊びや言葉を巧みに操った冗談などが好まれる傾向にあるが、本書を通じて、性愛に関する史料を通じて表現活動が、いわば主流文化ではない「同性愛」にまで広がっていたことをうかがい知ることができる。

他方で、前近代イスラーム社会における同性愛概念の萌芽については、疑問がないわけではない。それは、「同性愛概念の萌芽」の考え方である。著者は、イスラーム社会において、十三世紀には同性愛の概念の萌芽が見られると論じる。このような大胆な指摘は極めて画期的であるものの、フーコーを援用しながら、医学・性科学の発展とともに同性愛の発現を見出す著者の議論の導き方は、やや無理があるのではないかわざわざをえない。というのも、近代以降の性現象（性行動、性的欲望の総体）は、資本主義経済の成立と切り離せない関係にある。フーコーによれば、

十七世紀初頭までは許容されていた「卑猥なもの、猥褻なもの、淫らなものの基準」(フーコー1986=2009, 9)は、十七世紀以降、急速に沈黙させられるようになった。資本主義の発展とともに、性現象は夫婦を単位とする家族のなかに押し込められるようになっていった。労働力を組織的に搾取する時代において、性現象は、「有用かつ生産的なもの」(フーコー1986=2009, 10)、つまり労働力の再生産においてのみ許されるようになった、とフーコーは論じている。そして十八世紀に入ると、労働力と富の源として人口が政治的・経済的に注目されるようになり、性はその核心に据えられた。「出生率、罹病率、寿命、妊娠率、健康状態、病気の頻度、食事や住居の形」(フーコー1986=2009, 35)が、富と労働力を支える人口を大きく左右するものと認識されるようになり、「人口統計学、生物学、医学、精神病理学、心理学、道徳、教育学」(フーコー1986=2009, 44)の形をとって、性が多様に論じられるようになった。そして、これらの学問分野はそれぞれの立場から「非生産的な性行動」(フーコー1986=2009, 59)を否定することで、性的身体が統制の対象となっていく、とフーコーは言う。すなわち、西洋近代では、医学や性科学の発展は、資本主義の発展とそれを支える政治・経済と一体となって起きたということになる。「同性愛」概念の誕生を、ある種の病理として捉え、排除するために必要な「分類」であったと見ることもできるだろう。

このことを踏まえて、先述の問いに戻ろう。イスラム社会において十三世紀に同性愛概念の芽が見られたかという点である。当時の「同性愛」概念の萌芽は、近代西洋において権力装置としての性質を帯びた政治・経済、そして医学・性科学の発展と連動していたのだろうか。おそらく否だろう。当時のイスラム社会における「同性愛」がたとえ「性質」としてみなされたとしても、産業革命を迎える前の社会において、効率的な労働力の再生産のための権力装置を稼働させ続けるために「同性愛」という分類が行われ、統制の対象となったとは考えにくい。近代化論とは、旧植民地が国民国家を形成するにあたって、民主化や世俗化を含む近代化を推し進めようとする議論である。このような思想には、かつての被支配者である旧植民地が、先進的な西洋社会を目指して直線的な「発展」を遂げるよう企図されていたとされる。本書は、西洋社会の後追いではなく、西洋社会に先んじていたことを指摘するものであるものの、やはり「同性愛」概念の誕生や成立を目指すべき方向として設定し、検討したもの、と捉えられかねない。

とはいえ、本書は、ここまで論じた通り、史料を丁寧に読み込み、また紹介しながら検討した労作であり、上記の私見は重箱の隅を突く指摘と言わなければならない。実際、著者の勇敢な議論には、さまざまな期待が膨らむ。イスラム社会においては、西洋社会に六世紀も先立って同性愛概念が芽生えたとすれば、そこからの六世紀、あるいはそれ以上の期間、イスラム社会における同性愛の概念はどのように展開していたのだろうか。そして現代もなお、イスラム社会においては、同性愛は概して性的指向ではなく、病理のようにみなされることも少なくない。本

書のなかで展開された画期的な議論と、現代まで続く同性愛嫌悪とも呼ぶべきものが、どのように接合し、あるいは分断しているのか、今後の研究を通じて還元されることが待ち望まれる。

参考文献

フーコー、ミシェル『性の歴史 I 知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986＝2009年

保井啓志著『権利の名のもとに－イスラエルにおける性的少数者の権利と動物の権利』東京大学出版会、2025年